

資料

神奈川県域におけるインフルエンザの 流行状況 (2016/2017シーズン)

渡邊寿美, 嘉手苅将, 佐野貴子,
近藤真規子, 黒木俊郎

Epidemic of influenza in Kanagawa Prefecture(2016/2017 season)

Sumi WATANABE, Sho KADEKARU,
Takako SANO, Makiko KONDO
and Toshiro KUROKI

神奈川県域（横浜市，川崎市，相模原市および横須賀市を除く神奈川県内，以下県域）における季節性インフルエンザ（AH1pdm09, AH3, B）の動向を把握するため，通年で季節性インフルエンザ調査を行っている。また，AH5, AH7等の鳥インフルエンザのヒト感染事例が報告されている地域からの帰国者等，鳥インフルエンザ感染が疑われる患者に対しては，季節性インフルエンザの他に鳥インフルエンザのAH5とAH7も組み込んだ病原体検査対応を行っている。2016/2017シーズン（以下本シーズン）におけるインフルエンザウイルスの動向を報告する。

本シーズンの患者報告数は，2016年46週（11/14～20）に流行開始の目安となる定点あたり患者報告数1.0人を超えた後，緩やかに増加していき，2017年2週（1/9～15）に注意報レベルの10.0人を，3週（1/16～22）に警報レベルの30.0人を超え，4週（1/23～29）にピーク（50.71人）を迎えた。その後患者報告数は減少に転じ，10週（3/6～12）には8.98人となって注意報レベルを下回り，流行は終息に向かっていると思われた。本シーズンは，2016年46週に流行期に入っており，AH1pdm09によるパンデミックの2009/2010シーズンを除くと，2007/2008シーズン以来の早い流行期入りとなった。また，2017年13週（3/27～4/2）の患者報告数は5.82人で流行は継続状態であり，終息時

期は例年と同様に4月末（17週）以降になると考えられる。したがって，本シーズンの流行期間は昨シーズンの17週間（2016年1～17週）よりも長くなった（図1）。

ウイルス調査は，2016年36週（9/5～11）～2017年13週の間にはウイルスサーベイランス（県域の病原体定点調査）と入院サーベイランス（県域のインフルエンザと診断された入院症例），集団かぜ調査（県域保健所管内の初発事例）として採取された検体を対象に行った。ウイルスサーベイランスの検体は469例，入院サーベイランスの検体は4例，集団かぜの検体は10集団40例，計513例であった。検査はリアルタイムRT-PCR法による遺伝子検出とMDCK細胞によるウイルス分離を行った（一部の検体については，ウイルス分離あるいは遺伝子検出のどちらか一方のみを実施した）。遺伝子検出はインフルエンザウイルスのHA遺伝子を対象とし，AH1pdm09, AH3, Bビクトリア系統，B山形系統の型別を行った。また，ウイルス分離株は，国立感染症研究所から配付された標準抗血清とモルモット血球を用いた血球凝集抑制反応を実施し，AH1pdm09, AH3, Bビクトリア系統，B山形系統に型別した。

インフルエンザウイルスの検出状況を図1に示した。2016年37週（9/12～18）に定点医療機関の検体からAH3が検出され，翌38週（9/19～25）には県域初発の集団かぜ検体からもAH3が検出された。その後も毎週AH3の検出が続き，本シーズンはAH3を中心とした流行になった。また，2月以降になるとB型の検出割合が増加した。検出されたインフルエンザウイルスは470例で，その内訳は，AH3が410例（87%）で最も多く，Bビクトリア系統が41例（9%），B山形系統が14例（3%），AH1pdm09が5例（1%）であった（図2）。インフルエンザウイルス検出例のうちウイルスが分離できたのは340例で，AH3が285株，Bビクトリア系統が39株，B山形系統が11株，AH1pdm09が5株であった。

集団かぜ調査においては，9月から12月の間に県域10保健所管内のうち9か所で初発の発生報告があり，1月に発生した1集団も含めて9集団からAH3が検出された（1集団は不検出であった）。なお，本シーズン中に鳥インフルエンザ感染疑い症例の検査依頼は無かった。

インフルエンザウイルス検出者（470例）の年齢構成は，5～9歳と10～14歳が最も多く24%ずつ，次いで0～4歳が10%となっており，14歳以下が58%を占めた。他の年齢群は3～9%であった（図3）。

入院症例4例の咽頭拭い液についてインフルエンザウイルスの検出を行ったところ，3例からAH3が検出され，1例は不検出であった。それぞれの検体採取時期は，1～3例目が流行のピーク時期と一致する2017年2～

3週、4例目が13週であった。入院患者の年齢構成は、1～3例目が成人（65～90歳）、4例目が小児（2歳）であった。（表1）

にご協力いただきました医療機関の先生方および検体搬送にご尽力いただきました県域保健所職員の皆様に深謝いたします。

最後になりましたが、検体採取および患者情報の収集

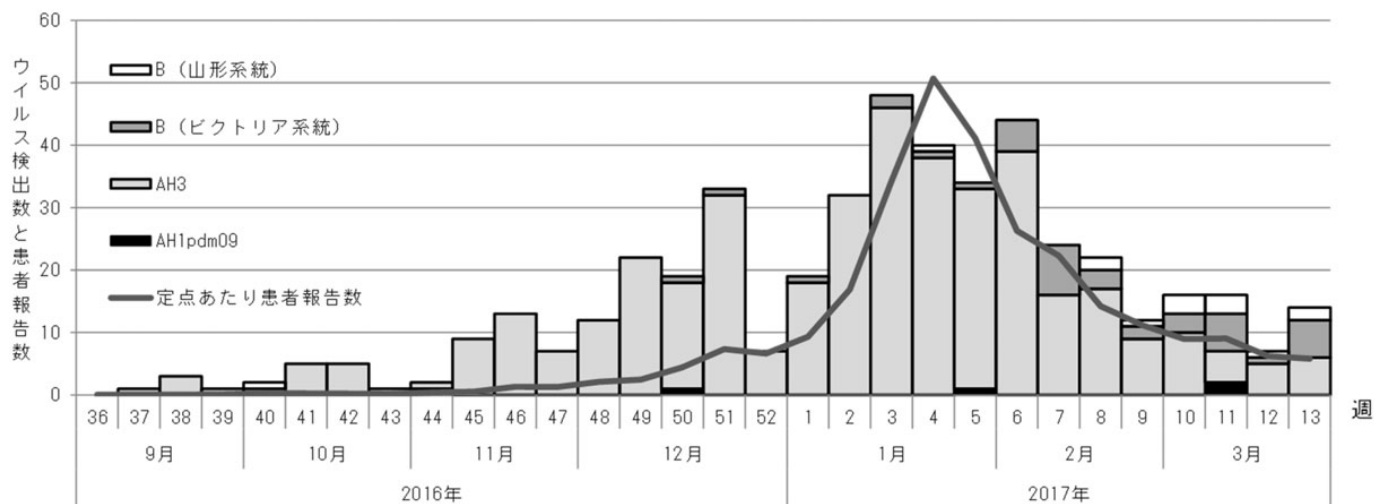


図1 インフルエンザウイルス検出数と患者報告数の推移

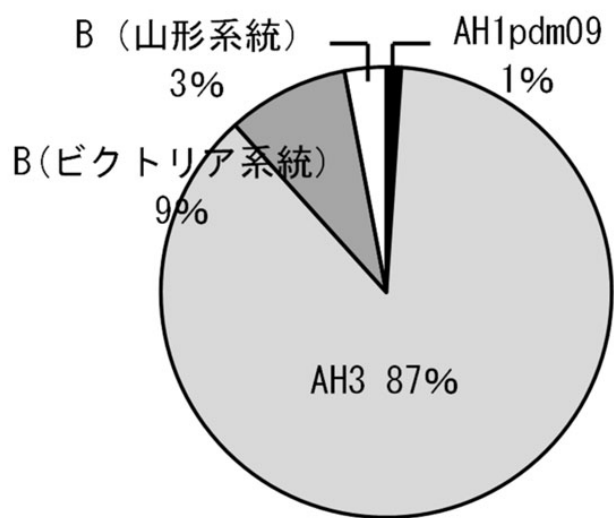


図2 インフルエンザウイルス検出割合

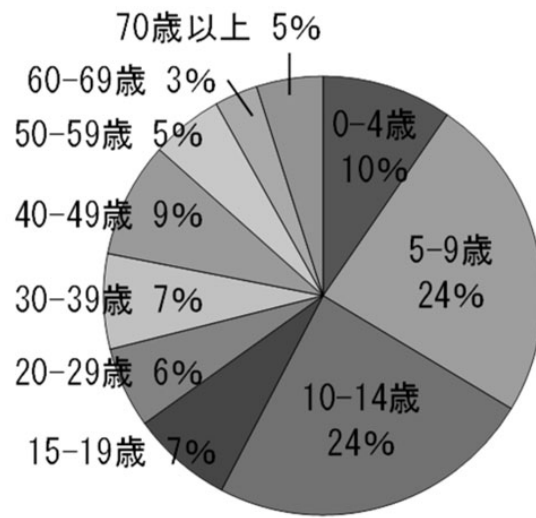


図3 インフルエンザウイルス検出者の年齢構成

表1 入院症例のインフルエンザウイルス検査成績

症例	検体採取週	年齢	臨床症状	インフルエンザウイルス検出
1	2017年2週	80歳	発熱（37.7℃）、上気道炎、下気道炎（肺炎）、意識障害、腎機能障害、横紋筋融解症	AH3
2	2週	90歳	発熱（38.6℃）	AH3
3	3週	65歳	発熱（39.3℃）、関節痛、筋肉痛、横紋筋融解症	AH3
4	13週	2歳	発熱（39.8℃）、上気道炎	不検出